



KYODO ARCHITECTS & ASSOCIATES

2019



社外報 大切にすべきもの

大切にすべきもの

代表取締役社長 鈴木 慶治

新国立競技場が使えない状況で始まった日本開催のラグビーワールドカップのできを勝手に心配していましたが、始まってみると日本代表の活躍もあって、大いに盛り上がりました。オリンピックと違い、全国各地で開催されたことも功を奏し、日本全体がまさに「One team」になれた素晴らしい大会になりました。奇跡の勝利といわれたアイルランド戦の前にヘッドコーチが選手に語り掛けたという「誰も勝つと思ってない。誰も接戦になるとも思ってない。誰も僕らが犠牲にしてきたものは分からない。信じているのは僕たちだけ——」という詩が強く印象に残りました。この言葉通り、信じられないような努力のもと、すべての選手・スタッフが自らの役割を果たした上の「結果」を、すべての日本人が誇らしく思ったことでしょう。どのような活動も表に現れる形にばかり目が行きがちですが、結果を出すための地道な努力の積み重ねが、最後本物の「かたち」を生み出します。

私たちが「生活（治療・リハビリ・生きる）のための空間はいかにあるべきなのか」を大切に、深く考え、繰り返し突き詰めていくことによって導き出される「かたち」は、単に課題に応えるだけの活動では得られることのない結果であると考えています。今年の当社の60周年記念式祝辞のなかで日本医療福祉建築協会・会長の中山茂樹先生から「共同建築設計事務所にはいつも刺激的な提案を見せられるが、一方でスタンダードになるような建築もつくって欲しい」という課題をいただきましたが、まさに私たちはこれに応える活動をしたいと思っています。

以前、私たちが毎年のように医療福祉建築賞を受賞していた頃は、ある意味では試行錯誤の時代だったとも言えます。私たちが得意とする医療福祉の建築は、効率と機能性ばかりが求められ質素でローコストでつくるものだとされていました。しかし、その機能に利用者を癒す「環境性能」が加わった頃、バブルの影響もあって、比較的豊かな予算のもと新たに様々な提案ができるようになりました。結果、ある意味挑発的な私たちの提案が評価されたこともあり、「共同」をよくご存知の皆様にはそのころの印象が強いと思います。

その後、受賞の対象となるような作品は減りましたが、その時代に積み上げた提案の中に私たちが長く「大切にすべきもの」を見つけることができました。一つ一つの作品は、完成形として存在しますが「大切にすべきもの」をその作品ごとに深め、成長させながら、繰り返し新たな「かたち」にすることで、まさに「本質」が見えてくると実感しています。

スタンダードになるためには時間がかかります。「共同建築」の私たちはラグビー日本代表のように、個々がくじけそうになっても、皆様から新たな刺激をいただきながら、共有して信じるものを大切に、機能的で豊かな生活空間の可能性を追求し続けていきたいと思っています。

昨年、20回続いた社外報は60周年記念誌を発行することに代えさせていただきます。今年再開するにあたって、時代に合った配信の仕方としてホームページを充実し、その中で改めて毎年私たちが取り組んできた作品や考え方を紹介することに致しました。この社外報を通して共同建築設計事務所をご理解いただき、皆様のパートナーとしてお役に立てることを心から願っています。

INDEX

大切にすべきもの

TOPICS

- かすみケアグループ：
医療・福祉・住まいを通して地域
に貢献するかたち 03
- 都会で暮らす人々の「生きる」を
支える取り組み 05

WORKS

- いわき病院 07
- 公立松任石川中央病院
人間ドック・健康増進センター 08
- カーサ・ヴェッキオ 09
- Windy 令和 10
- 鳩が丘さくら福祉センター 11
- マンション
ライオンズ朝霞本町ステーションプレイス
クリオレジダンス八王子ザ・マークス 12

AWARD

- 公共建築賞・特別賞
(国土交通省大臣官房・官庁営繕部長賞)
長野県立こころの医療センター駒ヶ根 13

NEW MEMBERS

- 私の建築家像 14

TOPICS

今から22年ほど前、日本医療福祉建築協会による「高齢者ケア施設設計競技」において、私たち共同建築設計事務所の「WAKABAYASHI PROJECT」は優秀賞5点の中に選ばれました。課題は定員30～50人程度の入所施設。しかし、それに対して私たちが提案したのは入所施設ではなく「住み続けられるマンション」でした。地域計画的視点と住居単体の改善、それらをつなぐケアシステムの構築を目指しながら提案を作りました。提案主旨の中で私たちはこう述べています。「2020年に在宅での生活が不可能な方が果たしてどれくらいいるのか、私たちの想像の域を超えています。選択肢として施設ケアも残るかもしれない。しかし、少なくとも建築は単体では存在しないので、現状の矛盾だらけのシステムの中にあって、1つの施設をより良くする以上にやるべきことがあった、というのが私たちが施設を作らなかった理由です。」

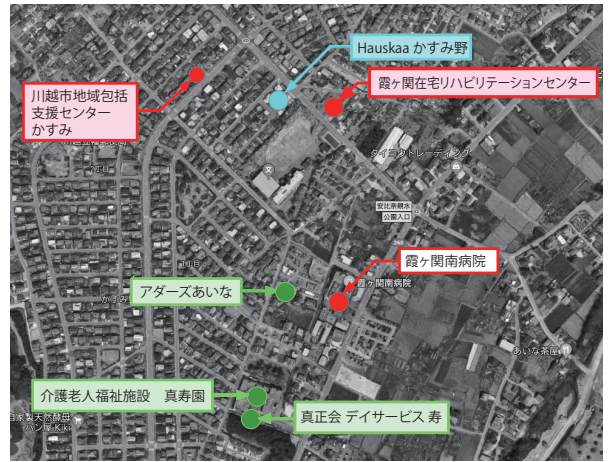
あれから20年以上の間に地域包括ケアという考えが確立し、まさに、高齢者のすまいそしてそれを支えるネットワークは多様化しています。私たちは一設計事務所であり、日常取り組む建物は1つ1つ単体の建物ですが、地域と共に歩むクライアントと志を同じくしながら、結果として私たちもまちづくりに関わって来られた幸運を感じずにはられません。

今年竣工した、「Hauskaa かすみの野」「潮騒の家」という2つの高齢者の住まいとともに、その歩みを紹介します。

かすみケアグループ：医療・福祉・住まいを通して地域に貢献するかたち

かすみケアグループは、医療法人真正会、社会福祉法人真正会、一般社団法人 Hauskaa という3つの法人が一体となり、川越市内に医療・福祉の事業を展開しています。入院や外来（医療）、通所や訪問（介護）などのサービスを展開して、地域の方々が安心して暮らし続けられるよう、それぞれの施設や専門スタッフが互いに連携するなど、一体的な地域包括ケアを実践しています。私たちが手掛ける建物としては、介護老人福祉施設「真寿園」、地域密着型認知症グループホーム「アダースあいな」に続くプロジェクトが近ごろ2棟完成しました。

この2つの建物は共通のデザインコードを用いています。木製ルーバーと深緑の外壁材です。これは北欧の街並みや建物からヒントを得たもので、木材の自然な色合いや温かさ、深緑の落ち着いた色彩を共に使用することで、地域に安心感を与えることを意図しました。（Hauskaa とはフィンランド語で『楽しい時間』という意味です。）



当社設計施設（霞ヶ関南病院除く）



パサージュ（エントランスホール）

■ Hauskaa かすみ野

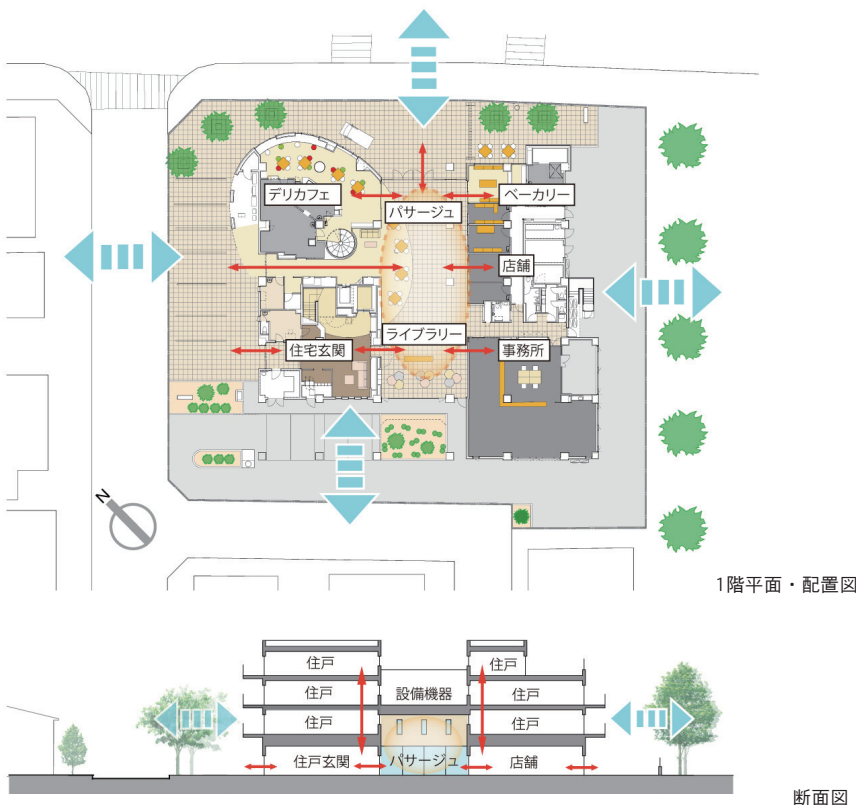
本計画は、サービス付き高齢者向け住宅でも有料老人ホームでもない、60歳以上であれば誰でも入居できる、新しいタイプの高齢者向け共同住宅です。

昭和50年代、かすみ野の住宅団地には大通りに面して様々な商店が立ち並んでいましたが、時代の変化や住民の高齢化とともに形を変え、その面影は失われてしまいました。昭和47年に開設された霞ヶ関中央病院を、霞ヶ関在宅リハビリテーションとして近隣へ移転新築し、病院跡地に本建物を建設するにあたっては、かつての時代の風景をいまの時代に合ったかたちで再現したいという思いが強くありました。将来的には、団地に一軒家を構えていた方が住み慣れた地域で暮らし続けるため、Hauskaa かすみ野に移り住み、自宅を若いご家族に貸すというような循環が発生することも視野に入れた計画です。

□ 地域に開かれたパサージュ

元霞ヶ関中央病院の建物の一角には、会話を楽しんだり軽い運動が行えるスペースがあり、長く地域の方々に親しまれていました。その使われ方を継承しながら、かつての商店街の賑わいを取り戻す役割を持つ場所として、建物の中心に、地域に開放された空間＝パサージュを設けました。パサージュは吹き抜けのある広い空間とし、飲食や談話、ライブラリーなどのスペースとして様々な使い方ができます。ここが地域活性化の起点になるとともに、上階に住む高齢者が地域活動に参加しやすくなり、充実した社会生活を営むことができると考えました。

各テナント、住戸、事務所などへは



1階平面・配置図

断面図

パサージュを通してアプローチできる設えとすることで、賑わいのある空間を演出しています。

□高齢者が住みやすい住宅

2階から上は約40㎡（4階は60㎡）を基準とした高齢者向けの住宅（30戸）の計画です。高齢者向けといっても、若い人が住んでも違和感がなく、介護が必要になっても生き生きと住み続けられるさりげない配慮が求められました。各住戸は細かく仕切らずゆったりとした空間で、玄関→リビングダイニング→寝室→水周りの関係性で構成し、奥に行くに従いプライバシーが高まる設えとしています。キッチンの高さを一般的な85センチとし、下部をオープンなつくりとしています。簡単な工事で高さを9センチ下げることができます。この仕掛けにより、車椅子での利用にも対応可能としました。

□地域になじむ建築

住宅地に立つ建物としてはやや高層になるため、できるだけ周囲に対して圧迫感を与えないよう、住宅階（2～4階）を4つのボリュームを分けて配置しました。また、外壁タイルとパサージュに使用したタイルは、細かな横線のテクスチャーをもった一般に普及し



北東側外観

ているタイプですが、これを市松状にデザイン貼りすることで、光の当たり方、見る角度によって繊細かつ華やかな表情の壁面を構成することができました。

□建物概要

所在地：埼玉県川越市
 建築主：一般社団法人 Hauskaa
 施設内容：共同住宅30戸
 飲食店、店舗、事務所
 構造規模：鉄筋コンクリート造 地上4階
 延床面積：3,082㎡
 竣工年月：2019年6月
 撮影：千葉顕弥



デリカカフェ Rikas：お惣菜とカフェ



居室

■霞ヶ関在宅リハビリテーションセンター



南西側外観

本計画は60人が日中過ごすことができるデイケア＝「デイリビング」計画です。計画にあたっては霞ヶ関中央病院の病室跡を利用していた際の使われ方を踏襲しながら、面積をコンパクトにする必要がありました。

外観は、周辺環境に配慮し、戸建てのスケールに馴染むボリュームをすることを心掛けました。片流れの屋根を採用し、隣地に近い部分を低くしながら、屋根の高い部分にはハイサイドライトを設け、建物中心の吹き抜け空間を通して建物全体に自然光が行き渡るようにしています。

階層構成は、1階にデイリビング、2階に地域開放スペースとスタッフエリアというように、利用者・スタッフ・地域住民のエリアを明確に分けて配置しました。

デイリビングは複数のリビングを可動間仕切で仕切り、少人数による落ち着いた活動とリビング全体を一体的に利用したイベント等を行なうために、部屋の広さを自由に調整できるように工夫しました。各リビングはラウンジに面しており、より小規模な活動や湯上がりの休憩など多用途に使用することができます。また、診察室や静養室、



エントランスホール

水廻りはラウンジからのアクセスとし、各リビングから近い配置としました。

2階の地域開放スペースは、エントランスに設置した階段からアクセスするつくりとし、地域の方が気軽に利用できることを意図しました。

□建物概要

所在地：埼玉県川越市
 建築主：医療法人真正会
 施設内容：老人デイケア
 構造規模：鉄骨造 地上2階
 延床面積：1,267㎡
 竣工年月：2017年12月
 撮影：千葉顕弥



ラウンジ・リビング（間仕切を開放したところ）

神戸市の東灘区に拠点を置く医療法人明倫会 宮地病院は、神戸市の発展と共に東灘区の地域医療を支えてきた民間法人です。阪神淡路大震災により再建した病院は竣工後 22 年を経て、現在は病院機能である外来診療部、病棟、リハビリテーション部に加え、メディカルフィットネス、短時間通所リハビリ、重度認知症デイケア、院内保育所・地域支援部門を併設し、認知症疾患医療センターの指定を受けて、地域の医療を支えています。

明倫会は、震災を機に地域密着型の医療福祉に方針転換し、様々な取り組みを行なってきました。地域で求められるニーズも年々変化し続けていくなか、法人と共に考え、設計の立場から提案してきた建築を通して、地域の暮らしを支える「拠点づくり」を紹介します。



■高齢者を支える拠点づくり

病院再建と共に「老健あずさ」を病院北側に建設。その後、介護拠点として 2001 年「ぼー愛」、2007 年「愛しや」を建設。集団処遇が前提の施設基準しかない頃、終の住処として全室個室のユニットケアに取り組み、個の空間を大切にしながら各々の生活が共用空間にもにじみ出てくるような住いを作ることができました。

■地域を支える病院の成長と変化

そして宮地病院は、再建から 8 年後の 2005 年に 1 回目の大改修を行いました。高齢者リハビリの強化を行うために、5 階全体を総合リハビリ室にフロアを改修。療養病床の一部も回復期リハビリテーション病棟に変更し在宅復帰に向けた取り組みを強化しました。

2014 年、宮地病院の姉妹病院として、本山リハビリテーション病院を開院。宮地病院の回復期リハビリ病棟をそちらに移したことで、病棟 1フロア分の余剰空間に「スタジオM」「Reborn」「ころねん」「つくし」を新たに開設しました。これにより宮地病院は、地域住民が予防医療や医療型認知症ケア等のサービスを提供する場に生まれ変わっています。

□短時間通所リハビリ「リハスタジオM」

送迎付きで 2 時間程度の運動プログラムが用意されています。短時間での通所は男性にも人気が高いそうです。

□メディカルフィットネス「Reborn」

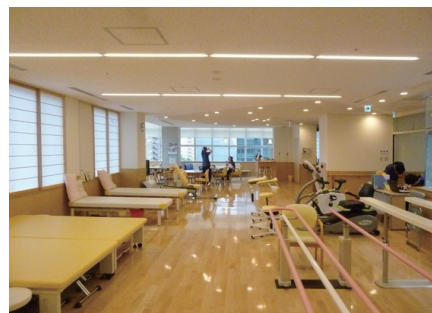
生活習慣病の予防・改善、地域住民の健康維持に健康運動指導士を配置して運営しています。

□事業所内保育所「ころねん」

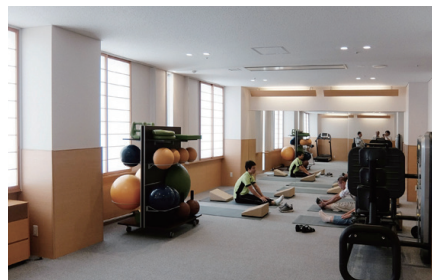
地域の方も利用可能な 2 歳児までの小規模保育所です。旧スタッフステーションと病棟浴室部分を有効に活用しました。六甲山を借景できる環境の中、畳敷きの保育室では自由に子ども達が走り回れる豊かな空間を作ることができました。

□重度認知症デイケア「つくし」

高齢化社会の身近で切実な問題として、様々な認知症対応に取り組みられています。その一環として、重度の認知症の方を預かるデイケアを開設。管理諸室に改修していたエリアを再度改修しています。



旧個室病室と病棟食堂を改修した「リハスタジオM」



西側4床室群を改修したメディカルフィットネス「Reborn」

ホスピタウン構想

「今後、取り組みたいことは、ユニバーサルな地域づくり。これまで高齢者の医療に取り組んできたので、障がい者や障がい児にも枠を広げていきたいですね。いま、高齢者のための施設も増えて、居場所が限定されてしまっていますよね。でも、高齢者、障がい者、子どもを別々の場所にそれぞれを集めて効率的に対応するのは、終わらないといけない気がします。それぞれの尊厳と考え方や生き方は尊重されるべきだと思います。だから、これまでのような施設ではなく、家のような場づくりから始めたいと思っています。」

(明倫会理事長 宮地千尋
クラシズム 2018 年夏号掲載)



たたみ敷きの「ころねん」

次に紹介する「潮騒の家」では、「ホスピタウン構想」のひとつとして、ある程度重度の方でも介護・医療サポートをしながら生活を支えることが出来るサービス付高齢者向け住宅を紹介します。

□建築概要

施設名：宮地病院
建築主：医療法人明倫会
所在地：兵庫県神戸市東灘区

改修年：リハスタジオM 2016 年
Reborn 2016 年
ころねん 2017 年
つくし 2017 年

撮影：山下健司(所員)



北側外観



個室前のラウンジ・キッチン



個室

■潮騒の家

神戸市東灘区は、阪神淡路大震災によって暮らす年齢層が大きく変わった街ですが、他の地域と同様に高齢化と核家族化が進んでいます。長年暮らしてきた自宅での生活が不安になったとき安心して生活できるサービス付き高齢者向け住宅は、「可能な限り自立した生活が可能なコンパクトな個室」と「お互いの生活が自然に交じり合うことで支えあう」ことが大切であると考えました。

多くのサ高住は一般的なワンルームマンションのように、間口が狭いが最新の住宅設備を装備した25㎡程度の住戸を横並びに並べた建物タイプですが、ここでは全く異なる建築構成を提案しました。

個室は流し台とトイレが付いた18㎡というコンパクトな空間ですが、介護度が上がっても状況に応じてベッドレイアウトも変えやすく、車椅子もトイレも利用しやすい寸法・配置を追求しています。その個室7つをひとまとまりにし、ひとつの新しい「家」と考えました。個室の扉は木製で、個室内外の生活音がわずかながらあふれ出します。個室が面するホールに小さなリビングがあり、その先に大きなラウンジやキッチン、浴室、洗濯ができる湯上りスペースを設けました。小さな個室から出て、自然にこれらの機能を使いたくなるような構成により、住民どうしで自然な交流が生まれることを期待しています。

建築的には、この「家」を3つの房

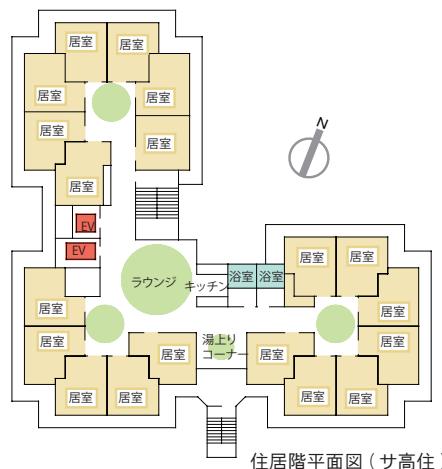
としてL型に配置した構成ですが、わずか柱12本の鉄骨の柱で支える構造としています。鉄骨造の特徴を活かし、大きな空間を生み出しつつ杭の本数や基礎を軽減することで合理的に建築費を低減させ、かつ「住まいの質」を保ったまま豊かな空間を提供することができました。

この地の象徴である神戸の海と六甲山の緑を楽しむことができる恵まれた環境で、これまで不安だった生活に医療・介護の支援を受け共に暮らすことで、安心感が生まれると考えています。そして、これまでと同様、自分の生活を楽しみ、社会と関わっていることを

意識しながら、新しい生活を豊かにすることができる住宅が完成しました。

■生きがいを持った暮らし

宮地病院の取り組みから今日まで大切にしてきたことは、個々の環境を大切に、社会から一歩離れた環境での療養生活を余儀なくされたとしても、社会との繋がりが保てる環境を用意することです。都市部の高齢化が進む中で、長年住まれてきた地域で人間関係や、家族の支えを維持し、地域の中で暮らし続けられる環境をしっかりと用意することで「生きがいを持った暮らし」が継続できると考えています。



住居階平面図(サ高住)



住居詳細図

□建物概要

所在地：兵庫県神戸市東灘区
 事業主：神恒物産(株)・医療法人明倫会宮地病院
 施設内容：サービス付き高齢者向け住宅50戸
 看護小規模多機能型居宅介護

構造規模：鉄骨造 地上4階
 延床面積：2,308㎡
 竣工年月：2019年1月
 撮影：増田寿夫写真事務所



外観全景

国立病院機構いわき病院は、重症心身障害児(者)・神経難病の入院機能をもつ病院です。

私たちがいわき病院の設計に携わることになったのは、2010年4月からスタートした、3期にわたる現地建替え計画からでした。第一段は、重症心身障害児(者)の病棟とリハビリ訓練室を建替える計画でした。病院は海岸線から100mほどに位置していたため、オーシャンビューの病院をキャッチフレーズに計画を進めていました。ところが設計もほぼ終わりという時に東日本大震災がおり、人的な被害はなかったものの診療部門はひざまで水位が上がり、入院患者は全て他院に避難しました。ほどなく、防災対策工事を行い、病院は再開されましたが、将来的な安全を担保するため、津波の心配のない内陸部に移転することとなりました。

移転敷地は、海岸線より4kmほど内陸部に入った水田地帯で、土地収用法の摘要により病院用地が確保されました。オーシャンビューの環境ではありませんが、水田と里山と市街地がパッチワークのように広がる風景が、新病院の立地環境となりました。

患者の療養環境の改善、スタッフの労働環境の改善と共に、移転地域への貢献も新病院設計のテーマの一つであったため、イベント開催を想定した広めのエントランスホールに面して、地域の方々が利用できる多目的な部屋を配置し、来院者が利用しやすい計画としています。

2階の重症心身障害児(者)の病棟は、

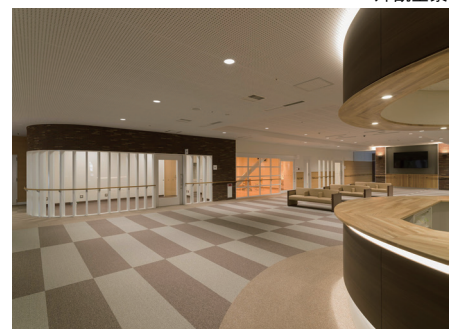
看護動線が短く運用に柔軟性のあるクラスター型の病棟としました。2つの病棟の接点に療育活動スペースを配置し、屋外デッキや病棟食堂と連結させることで大人数のイベントが開催できる空間としています。3階の神経難病病棟では様々なパターンの個室を用意し、窓高さを下げて視界を確保するなど、神経難病の患者特性に対応した病棟計画としました。

移転前のいわき病院では、毎年「いわき病院秋祭り」を開催していました。出店や各種演奏会などを催し、積極的に地域の方々と交流を深めていたことから、新病院でも敷地東側の駐車場でイベントを行うことを想定し段差や車止めを設置しない設えとしました。

国の政策医療としての役割を担う病院で一般の患者利用は限られますが、地域の中で愛され続ける病院として新しい歴史を刻んでいただきたいと思います。

□建物概要

所在地：福島県いわき市
 建築主：独立行政法人国立病院機構いわき病院
 病床数：154床
 (一般(神経難病・脳血管障害)70床、
 重症心身障害84床)
 構造規模：鉄骨造 地上3階
 延床面積：9,862㎡
 竣工年月：2018年9月
 撮影：スタジオナップス



ラウンジ、研修室、相談室などに面するホール



外来待合



食事のテーブルや姿勢保持用具などを壁面収納に納めた食堂



屋上テラスと一体で運用できる療育訓練室



国道8号より望む

石川県白山地域の中核となる公立松任石川中央病院の6回目の増築工事です。

医療を極めていくと、病気の治療はもちろんのこと、その前段階として予防医療も重要となってきます。健康的な生活を送れる期間を示す「健康寿命」をできるだけ平均寿命に近づけるために、医学的根拠に基づいた運動療法施設として、手狭になっていた総合健診センターを増築することで機能を強化するとともに、健康増進のためのメディカル型ウェルネスクラブ（フィットネス）を設置し、地域住民の健康に貢献する施設となりました。

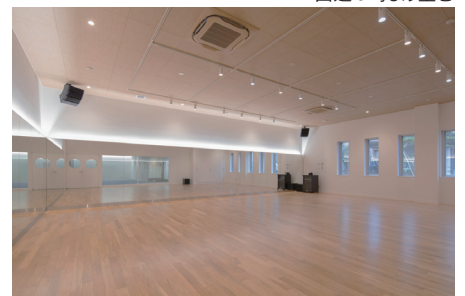
度重なる増築によって敷地に余裕がなくなったため、地域住民も利用する構内道路を挟んだ隣地に建設し、既存病院とは2階の渡り廊下で接続しています。

外観は病院の外壁カラーを踏襲しました。一連の病院建築群としてのまとまりを保ちながら、国道8号線側にいくつかの立方体を分節して並べてみることで道ゆく車の運転手の視線をとらえ健康増進センターに興味をもってもらうことを意識しました。

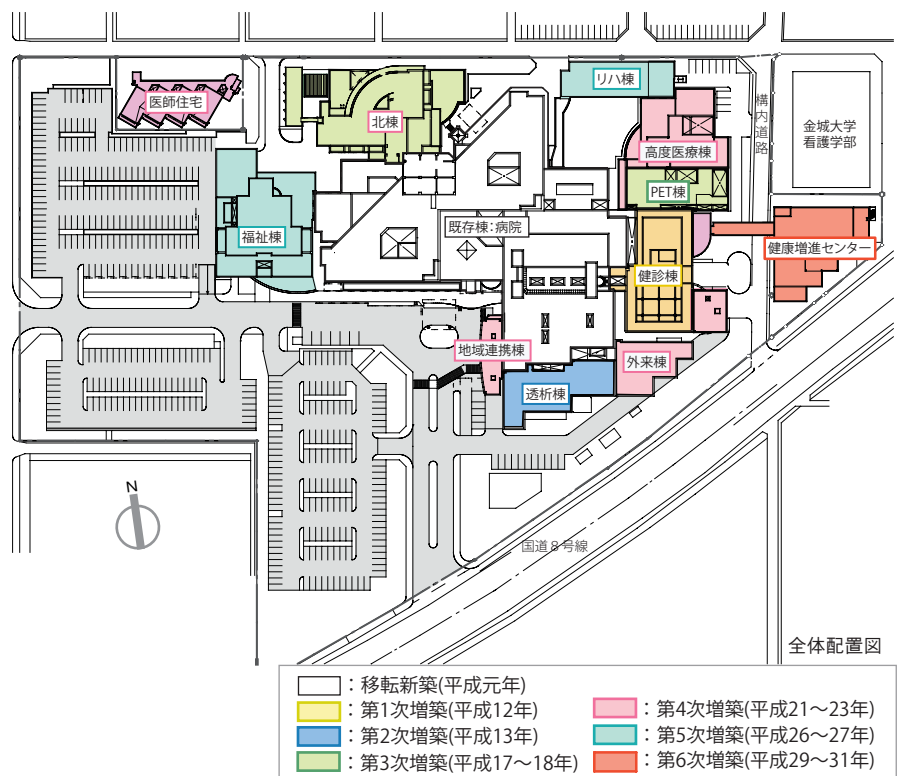
既存病院と2階でフラットに接続させたことにより、1階は潤沢な階高を確保できたことから、ジムエリアは天井の高い開放感のある空間とすることができました。2階の総合検診センターは、診療エリアとは雰囲気を変え、重厚で落ち着いた感のあるインテリアの中、ゆったりとくつろぎながら健康診断を受けることができます。



2階 総合健診センター受付



1階 スタジオ



□建物概要

建築主：白山石川医療企業団
所在地：石川県白山市
施設内容：健診センター
フィットネス

構造規模：鉄骨造 地上2階
延床面積：41,030㎡
竣工年月：2019年2月
撮影：studio9



外観 西側より

介護付有料老人ホーム「カーサ・ヴェッキオ」は福島県郡山市で40年にわたり地域の高齢者福祉を支えてきた法人が、定員を60名増やし、111室として移転新築した計画です。

居室階（2～4階）はコンシェルジュカウンターを中心とし、4つのユニット（8～10室）が放射状に広がる構成としました。スタッフの見守りのしやすさと動線の短縮を図り、同時にユニット間に外部空間を生み出すことで、プライバシーの確保と良好な室内環境を実現しています。放射状にヴォリュームが分散することで、周辺住宅地への圧迫感の軽減を図りました。

居室は介助のしやすさやプライバシーに配慮しレイアウトの異なる3つのタイプを用意しました。コンパクトでありながら生活を組み立てやすい居室環境としています。それぞれの居室は水回りの配置によって機能を変化させ、介護度によって求められる機能の違いに対応できる構造となるように配慮しました。

1階には関連高齢者施設へ食事を提供するセントラルキッチンと、敷地の高低差を生かした天井の高いコミュニティホールや多目的室、レストランを配置しました。施設内で多くの時間を過ごす入居者に自室、ユニットリビング、フロア内の食堂、1階の共有スパー

スといった多様な空間の中での生活を提供したいと考えました。また、1階を家と街との接点として地域の様々な人々の活動を受け入れることの出来る開放的な空間とすることで、地域の豊かな暮らしを支える建築を目指しました。



1階 コミュニティホール



全景（鳥瞰）



1階 レストラン



居室



2階 ユニットリビング

□建物概要

建築主：社会福祉法人 安積福祉会
所在地：福島県郡山市
施設内容：介護付有料老人ホーム 111名

構造規模：鉄筋コンクリート造 地上4階
延床面積：5,562㎡
竣工年月：2018年12月
撮影：朝日カラー



中庭・大屋根広場

奈良の畝傍山を望む万葉クリニック（病院・老健）のすぐ傍に位置する保育所の計画です。医療法人南風会の事業所内保育所として0～6歳の子も達30名が通います。2012年に病院を、吉野郡下市町より橿原市へ移転後、近隣の古民家を活用し院内保育所を運営されていましたが、より子どもの環境を大切にしながら経験豊かな人材の復職を支援できる取り組みとして、新しい保育所を計画されました。

橿原市の歴史は古く、中世では商工業都市として栄えた街です。その拠点であった今井町では「重要伝統的建造物群保存地区」としてその姿を残し、現在も古い家屋をカフェや雑貨店に改装しながら、観光地として当時の伝統建築が活かされています。そうした木造建築の良さを次の世代にも伝えていきたいという施主の想いからこの建築ができました。

この建物は、連続する大きな切妻屋根が特徴の木造平屋建てです。外壁は米杉板を防火処理したものを黒く染色塗装したものです。軒を低く抑え住宅と同じスケールに近づけながら、室内を屋根と同じ勾配天井とすることで、伸びやかで変化のある空間としています。内外ともに木造の架構をそのまま意匠に活かし、大工の技量がそのまま形となる造りです。伝統建築の持つ

木造架構の美しさを現在の工法で形づくり、子ども達が安全で快適に過ごせる空間を目指しました。

全体の構成は敷地中央に設けた園庭を、2棟に分けた居室が緩やかに囲んでいます。北の棟には、続き間で大小異なる空間の保育室を3室設けました。これによって、各室を駆け回ることができるだけでなく、食事や昼寝等、各室毎の生活に応じた使い方も可能です。一方、土間で仕上げた南の棟は、あえて室内と外部が曖昧なつくりとしました。外遊びや園行事に使える多目的な小屋となることを意図しています。また、この2棟の狭間に大屋根が日よけとなる外部空間を設け、夏の強い日差しや雨天でも遊べる広場を用意しました。そのいずれもが中央の園庭と一体になり、自然の風、光、匂いを日々の生活に取り込みながら、子ども達が豊かな感性を身に着け、健やかに育つことを願っています。

□建物概要

建築主：医療法人南風会
所在地：奈良県橿原市
施設内容：事業所内保育所 30名
構造規模：木造 地上1階
延床面積：225㎡
竣工年月：2019年6月
撮影：辰巳和良写真事務所



北の棟・保育室



南の棟・多目的室



外観



ひまわり学園・しいの木学園 エントランス

1970年に日本初の重症心身障害児の通園施設として開設した太陽の家を含む5つの障害者関連施設の建替計画です。

太平洋を一望できる小高い丘「鳩が丘」にそれはあります。今まで3つの建物に分散して建っていたものを、1つの建物に集約することで、スタッフの連携や利用者の交流を促すことを意図しています。また、丘陵地の高低差を利用して、1、2階ともに接地させることで、アプローチしやすく、また、災害時も避難弱者である施設利用者が安全に素早く避難できるように配慮しました。

内装において、今回留意した点は室内サインです。1階のしいの木学園では就労継続支援の一環として木工品の製作をおこなっています。設計に入った当初、体験入所させていただき、施設の使い方や利用者の生活の様子を観察した時の熱心な取り組み方を見て、是非とも新しい建物の中にこの木工品を取り入れたいと考え、室内サインの製作を依頼しました。結果として、建物にあたたかな表情が加わりほどよいアクセントになりました。

建て替え前は、道路と擁壁で分断した形で施設が建っていましたが、今回の計画による造成で南面する市道から直接アプローチできるようになりました。道路に面して広がる交流広場や円筒形で象徴的な喫茶室を道路側に設け、地域と交流のしやすい開かれた施設を目指しています。

そして来年3月には、知的障害者のためのグループホームもオープンし、本プロジェクトは完成を迎えます。



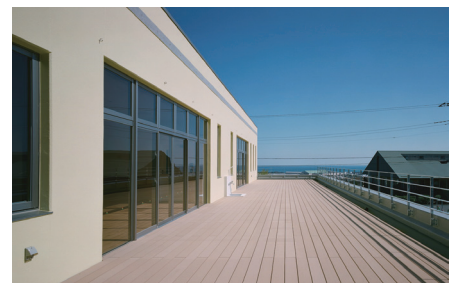
しいの木学園 作業室



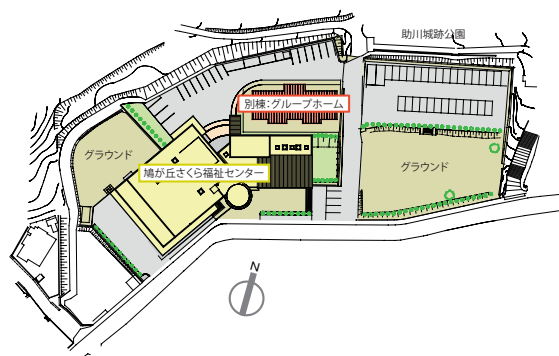
母子療育ホーム 多目的室
しいのき学園で製作された室内サインが採用されている



ひまわり学園 支援室



遠くに太平洋を望む屋上園庭



配置図



地域交流のための喫茶

□建物概要

建築主：日立市
所在地：茨城県日立市
構造規模：鉄筋コンクリート造
地上2階
延床面積：2,181㎡
竣工年月：2019年3月

施設内容：

しいの木学園 就労継続支援B型事業所 30名
ひまわり学園 生活介護（重度知的障害者）30名
太陽の家 生活介護（重度心身障害者）20名
母子療育センター 児童発達支援・放課後デイサービス
（肢体不自由児・重度心身障害児）40名
心身障害者歯科診療所
撮影：増田寿夫写真事務所



エントランス



外観全景

東武東上線「朝霞」駅から徒歩2分圏内に位置するファミリータイプ43戸のマンションです。4面接道という敷地を活かし、全戸南向きで明るく開放感にあふれた配棟とすることができました。近くには朝霞のシンボルである「朝霞の森」のほか、複数の公園が点在し、緑にあふれる潤い豊かな環境から私空間へ誘われます。建物のファースドは、まるで大きなシンボルツリーのように木々の葉や木漏れ陽、空から降り注ぐ光による陰影を表現し、駅前に新しい空間を演出しています。

な環境から私空間へ誘われます。建物のファースドは、まるで大きなシンボルツリーのように木々の葉や木漏れ陽、空から降り注ぐ光による陰影を表現し、駅前に新しい空間を演出しています。

□建築概要

所在地：埼玉県朝霞市
 建築主：(株)大京
 構造規模：鉄筋コンクリート造
 地上15階
 延床面積：3,464.73㎡
 施設内容：43戸（ファミリータイプ）
 竣工年月：2019年9月
 撮影：エスエス 東京支店



エントランス



外観全景

JR八王子駅、京王八王子駅、それぞれ徒歩3分という非常に利便性の良い土地にこの建物があります。多種多様な住まいの在り方に対応できるように、1LDK（30㎡台）～3LDK（80㎡台）までのバリエーション豊かな間取りを形成しています。街路樹を多く設けることで地域への環境にも配慮しました。

八王子の緑豊かな環境をイメージし、地域に溶け込みやすいアースカラーを基調とした外観デザインとしています。立地環境にあった、この土地に求められるものを取り込んだ建物が完成したと思っています。

□建築概要

所在地：東京都八王子市
 事業主：明和地所(株)
 構造規模：鉄筋コンクリート造
 地上15階建
 延床面積：10,667㎡
 施設内容：147戸（ワルム・ファミリータイプ）
 店舗1軒
 撮影：大河佳織

「公共建築賞特別賞」受賞の価値

鈴木 慶治

昨年、私たちが設計した「長野県立こころの医療センター駒ヶ根」が2年に一度表彰される「公共建築賞・特別賞」を受賞することができました。同時に表彰された東京駅舎やスカイツリー、国立京都博物館など錚々たる建築家による著名建築に並んでの受賞は誇らしいことでした。この作品は6年前に完成し、病院として十分使われた上での評価ですので、まさに公共建築として価値があると自負しています。

しかし、それ以上に精神科病院が純粹に「建築」として評価されたことに大きな意味があると思っています。この複雑で生きにくい現代社会の中で精神病が国民の5大疾病に数えられるようになり、精神科医療は身近なものとなればなりません。ところが、かつての鉄格子の外観を連想し、いまだに“怖いところ”という精神病院のイメージが敷居を高くしています。そのような環境の中で今回の受賞によって、精神科病院の機能を十分満たしながらも治療、リハビリに相応しい空間を一つ一つ丁寧に追求していけば、その建築は魅力的で美しいものになり得るということを示せたのではないかと思います。

この結果とともに建築の魅力が精神科病院の敷居を下げ、少しでも心の病で苦しんでいる人の受診を促し、地域に帰るための手助けができたならば、この難しい建築の設計に長年取り組む私たちにとっては望外の喜びです。

この結果とともに建築の魅力が精神科病院の敷居を下げ、少しでも心の病で苦しんでいる人の受診を促し、地域に帰るための手助けができたならば、この難しい建築の設計に長年取り組む私たちにとっては望外の喜びです。

第16回公共建築賞受賞建築物

公共建築賞

行政施設、文化施設、生活施設の部門ごとに、最も優れた建築物として選考
国土交通大臣表彰

行政施設部門

高知県庁舎(免震レトロフィット)



文化施設部門

京都国立博物館 平成知新館



生活施設部門

東京駅丸の内駅舎 保存・復原



公共建築賞・特別賞

特に優れた特徴を持つ建築物として、毎回2点内外を選考。今回は3点選考された
国土交通大臣官房官庁宮構部長表彰

東北地区 文化施設部門

弘前市民会館(大規模改修)



関東地区 文化施設部門

東京スカイツリー、東京スカイツリータウン



関東地区 生活施設部門

長野県立こころの医療センター駒ヶ根



■公共建築賞とは

優れた公共建築を表彰することにより公共建築の総合的な水準の向上に寄与することを目的とする。

企画や設計、施工が優れているだけでなく、地域社会への貢献や文化性に加え、施設管理、保全という視点からも評価されます。

(公共建築賞募集要項より一部抜粋)

審査員講評

本部審査委員会・委員

新居 千秋

(新居千秋都市建築設計代表取締役)

私は40年ほど前に、精神病院を設計した。当時の精神病院はかなり悲惨なもので、重症患者の入る保護室は独房の感じすらした。体験で1週間、病院で暮らしたり、その病院の先生と全国の優秀だと言われる病院を見て、インタビューをしたり、かなり頑張っ、当時としては最先端なものを作った。あの時、設計の難しさ、社会の冷たさを感じた。

長野県立こころの医療センター駒ヶ根を訪ねると私の予想を超える進歩がそこにあった。南アルプスの山並みとも合った建物であり、エントランス付近は一般の人や患者が混じっていられるとても暖かい雰囲気になった。トップライトのルーバーも細い単位で設けられており、街路をイメージしたエントランスからの通路は、普通の病院よりもアットホームであった。中庭は適切なサイズのゾーンに分けられ、心地良さを感じた。基本的な病院のタイプを守りながら、中庭からの採光が建物内部のどこでも明るくしていた。

窓の側に設けられた椅子、各個室、ラウンジ、ローコスト化の工夫や、ナス型をしたドアノブ、カウンターの高さやその工夫等、ものすごく地道に考えられていた。

「つくり続ける病院」を目指して

樋掛 忠彦

(長野県立こころの医療センター駒ヶ根名誉院長)

老朽化した病院の整備検討委員会が平成14(2002)年に始まり、平成24(2012)年の全面改築までは、苦勞も実りも多い年月でした。これも職員が一丸となり、かつ周囲の関係者の理解により漸く実現できたことでした。救急医療と専門医療を行う「こころの医療センター駒ヶ根」に生まれ変わり、地域の皆様の当院を見る目も変化したように感じられます。精神科受診への敷居が低くなり、気軽に手が届くようになりました。

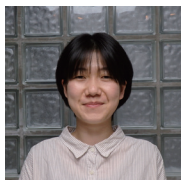
川村 真弘 (2017年入社)



建築を設計することは、人（住む・使う人）にとっての“器（うつわ）”を創ることと考えます。その器は人にとって使いやすいものでなければなりません。どのような物でも、しっかりと収まる

実用的かつ、見た目も良い器が理想的です。そのためには、その人が実際に器をどのような目的で使用するのかをきっちりと把握する必要があります。しかし、器を創るときと創った後で、その目的が変わることもあるため、ある特定の液体しか入らないコップのような、あまりにも、用途が限定されるような作り込まれたデザインにしてしまうと、不便が生じます。すなわち、後に、使いやすいようにアレンジできる最適な余地を残したデザインをすることが大切ということです。器をどこまで創り込むのか、どこからは創らないか（どんな用途にも対応できるように広い空間だけを設計し、後は住む人に任せるのか、家具まですべてをデザインするのか）を検討することが建築家の役目であると考えます。それゆえ、自分が良いと思うデザインを追求することが、最適な余地を生み出すことにつながるのかどうかを常に見極める力が必要になります。私は、特定の考えやデザインに固執することのない、何事にも柔軟に対応できる見極めの力をもった建築家でありたいと思います。

榎本 洋子 (2018年入社)



今でも読み返したくなる大好きな絵本があります。さとうわきこ作の「いそがしいよる」という絵本です。ご存知の方も多いのではないでしょうか。星のきれいな夜、夜空を見上げていたばばあちゃんは家の中からゆり椅子を庭に持ち出します。このまま家に入る

のはもったいない、いっそのこと外で寝てしまおうと次にベッドと毛布と枕を引っ張り出し、それからお茶の道具、あとテーブルやレンジも必要だ・・・と家のものを全部持ち出してしまいます。しまいには「雨が降ったらどうしよう」とテントを張り星空のことを忘れてぐっすり眠ってしまうのです。

庭に家財道具が広がっている絵に心奪われ、何度も見返しては「私も庭で寝る！」と言い張り親を困らせたのを覚えています。今思い返すと、部屋の模様替えをしたり、時には秘密基地を作る構想を練って断念したり・・・と、建築という分野を知る前から自分なりにお気に入りの空間づくりを楽しんでいたようです。

建築の仕事に携わってなくても日々の生活の中で空間づくりを楽しんでいる人は沢山います。私はその人たちの支えになるような建築家になりたいです。安心安全で人と環境にやさしい建築。とてもシンプルだけど一番大事なことだと今改めて思います。幼少期の思い出を胸に、設計者として成長を重ねていきたいです。

飯沼 一磨 (2017年入社)



「建築は人の記憶を集積する箱であり、場所の記憶を体現するものである。」という、ある建築家の言葉が私の心の中にずっと残っています。

その場所でしか生まれない建築に、その場所で起こりえるであろう、人の行

動を想起し、空間をしつらえたり、家具を配置したりすることに建築の本質があると思います。原理的なものを世界に広めるのではなく、その場所にたった1つしかない建築をつくること。時代を超えても誰かの記憶に残り続ける「固有性の建築」こそ、建築だと思ようになりました。

高校時代、私の祖父母の死をきっかけに、家は空き家となりました。それまでイベントごとに、祖父母の家に集まっていた親戚とは縁が切れたかのように連絡が取れなくなり、今では誰がどこで何をしているのか分からなくなりました。しかし、今も空き家の祖父母の家は、空間も家具もそのまま残っており、訪れると当時の記憶を思い返すことができます。ほんの些細な出来事や会話でも、誰かにとっては大切な記憶となり、その場所があることで、人と出会い、思いを語り合い、知恵を絞り、一緒に喜び合えることを知りました。言葉で言い表すことは難しいけれど、心の底に潜んでいる、静かに温かく響いて素直に心を動かすことができる箱。私にとって建築の原点は、そのような小さな記憶が集積した空き家に詰まっています。今では、そんな祖父母の家を設計した父のような建築家になりたいと思っています。

高瀬 敦 (2018年入社)



医療・福祉建築は都市・社会と建築・個人を結びつける役割があります。全国で行われているまちづくりや地域再生のプロジェクトにも医療・福祉のキーワードは必ず出てきます。これらが医療・福祉建築に興味を持った一番の理由です。

人口減少社会の日本では、医療・福祉建築のあり方は最重要視されるべきです。看護・介護の深刻な担い手不足によって、利用者のQOLが悪化していく可能性は高いと思います。そのような中で、利用者のQOLを守っていくのが建築です。利用者スタッフの双方が気持ちの良いと感じる空間をつくるために、建築家は多くのことを学びながら業務をこなしていかなければならないと思います。施主のために設計することは前提ですが、建築を通してよりよい社会になることを目指していくこそが、私の建築家像です。

フィンランドの「アルヴァ・アアルト」は私の好きな建築家の一人です。アアルトの出世作とも言われる「パイミオのサナトリウム」に見学に行ったことがあります。その建築は一見すると地味な印象でしたが、様々な箇所のディテールに使う人への優しさが感じられました。

建築家の中には、見たことのない空間や景色を追求する人もいます。その人がつくる空間も魅力的に感じますが、私は人にとって居心地のいい空間を追求していきたいと思っています。

